

はじめに

本資料は、筑波研究学園都市の建設が1963年の閣議了解によって決定された後、50年が経過する中で、国家プロジェクトとしてどのように新都市が形成され、時代によってどのような課題をどのように克服しつつ現在に至っているのかを、一つのストーリーとして提示するものである。ここでは既往の文献資料を参考としつつ、直近のつくばエクスプレスの開通後の動きも踏まえ、新都市の形成過程を3つの時期に区分し、「閣議了解から概成まで」、「官・民による都市機能の充実・発展期」、「つくばエクスプレス開通後」としてそれぞれに一つの章をあてて記述した。

また、記述の視点として、現在の筑波研究学園都市において顕在化している分散型都市構造からくる交通問題や社会環境の変化に伴う公務員宿舎の廃止・大規模未利用地の利活用問題、さらに公共公益施設の維持更新の問題等に着眼し、それらの由来を探る観点から、新都市建設のベースとなる「計画の役割」と「都市の整備運営」に関する5項目を設定し、その枠組みの中で課題と対処方策や結果の解釈を記述することを試みた。なお、筑波研究学園都市に対する理解を深めるため、同じく国が関与した関西文化学術研究都市についてその都市形成の概要を述べ、両都市を対比的に記述した。

調査は政策基礎配分経費による「筑波研究学園都市の形成過程の問題とその評価に関する研究」として2008年(平成20年)度～2012年(平成24年)度を実施し、関連する諸機関の担当者へのヒアリングと収集資料の分析を主体に進め、内容の追加、充実に努めた。ご協力頂いた方々に対して謝意を表したい。内容の至らぬ点に関する忌憚のないご意見を賜うことができれば幸いである。

なお、本文中に示した解釈や考察については、研究を行った執筆者によるものであり、執筆者が所属する国土技術政策総合研究所や国土交通省の見解を代表するものではないことを付け加える。

平成27年1月

国土交通省国土技術政策総合研究所

副所長 井上 勝徳